



糸

梅が香るや

昔を恋にふ女あり

梅の香る

夕うけ

月際北梅もあはれとて春は邊に
逢ひたる女や若れかゆ

本間文庫
文庫 14
A128

文庫14
A128



Faint handwritten Japanese text, possibly bleed-through from the reverse side. The characters are mostly illegible due to fading.

Faint handwritten Japanese text, possibly bleed-through from the reverse side. The characters are mostly illegible due to fading.



夕かげり

。

田山花翁

いまは恋もさるらぬ間に
はかなく消ゆる恋ばかり
悲しきものはあらざらん

少女ごころのやさしくと

花の急まひのしみくくと

こゝかに思ひ初めにしを

清きその眼とあひくして

あを耻かしくれあぬの

そのふり袖をおほひしを

かくと人も人の知らぬるに

かくと少女も言はぬるに

人はゆきけりほるくくと

あゝこりこしるあけ方の

空はくえくくふふ〜る

星のひかりと消ゆべきか

君が行くべきその日こそ
泣きてこゝろを明さめと
思ひしかりをいかにせば
今さらかくはふゆゝへる

あはれ恋ひとまづかしき
去がくを見そは秋いかた
三どれしこゝろ打あけて

君を泣かきにしるふづき

砂漠に老をばくとふねは
こひは砂漠に滯き出づる
うれしきまよき清ふかき

いくよひ人が立ち寄りて

その清きをばむらぶらん
疲劣もうれひも忘れり

さねどわか世の砂漠には
その清きを一絶えと多
あゝいかにして我にえん

いまはれよこに吾妹子は
とりう上りるひとつほし
なを指さして少か脊子よ
わねは折くともその星を
わらほと思へ少か脊子よ
あはれ吾妹子その海には
それと可うれとよ二人

うれしくこゝろ打明けて
かきりし森にかぐやまし
いとろづかしき星を

多ぶろありきの森うげに
塞むぞひとづ見いでる

誰のはてかと来て見ねは
わかき少女のはかぶりき

あはれ少女よきみはそも
いかでか早く世を去りし

ささふあらしう情なきに
つばしうまにちりにしか

濃きふれをの紅梅の
開きて燃えてちりにしか

君を恋ひにしひとはくれ
きしに誰をか恋ひませし

知らぬ少女のはかるれど
かくと思へばなきはて

そのあくる月に横子也

水は一りく手向けにき

日影とふりてとこせその
この世慈さはいづかり
人はめぐもをかふむらん

月としらりてしろがねの
ひかり放るばいはかり
人はうねりとわらふらん

さねとわりのねは真よりと

ほつにふらほやかり星に

夕のゆりにゆきひて

あに死にふるをとめ子の

墓をてらせるかうほしに

ハイ子の君よきみほるも

あはれか君かうひる

あにふるふるううは

とほくほきけきうつむら

いくふんやのむらより

あなをききり死ねるふ

そりふる池ねほきりほ

あを思へるゆひひくに

讀 ち 水 へ あり と なる や 君

君 し あり とも は け や ま う

こ う け し とも 一 し ぼ に

心 へ とも 見 し あり へ

う れ ど 恋 し き とも あり は

こ う う み 山 と い う かく

楽 し く 水 は 見 ら る べ き

乾 く を あり ごと し 一 に

は げ し き 恋 に とも ぎ とも

こ う あり ごと し 乾 き あり

こ う 世 は い かに 味 気 なく

我身はいちかららん
乾く子あまごとこし一は

言ふるとかむる水か友こ
沈むがちぬるこりままこ

言ふをいさめをゆか友よ
あそみて恋にくる一よと

君にかこりて打ちあけて
狂はんとけりくくと
思ひて来つるさひいとは
人にゆく一く子りにまこ
きみはかのねに語れまを

悲しき旅路とありてけり

梅のほろ吹くつきの瀬の
きよきさかかに思ひ出でし
君を恋ひんとおもひしに

悲しき旅路となりてけり
くら野のたぐの草まくら
一夜のゆめにきみを見て
さめて泣うんと思ひしに

あまはよし野のほろ奥
ま日のやまうほろかた
あまはあらしう山のかけ
うませり奥のたぐちつき

くらひつ癖ひつ乱れ
君がたもわをたぐひ程に
うまう旅路をゆめり

まがしんぞばかり思ひしに

今はそれぞ一絶之果て

あまのりそま づき果て

悲しき旅路をありてけり

あゝいかにせんこり旅を

まがしんぞばかり思ひしに

わが世は墓とりにけり

あまのりそま づき果て

あゝいかにせんこり旅を

君をのびしとわれいと年

歌ひつ癖ひつくるひけん

闇に月夜にわれいとび
君かありをよりひけん

絶ゆるかこしき琴の音に
こころをよせし
神のやしろをまはし
あこいと度かありけん

そとにけちあり月ありき
高かきよりぬふるを
宮の中はともし火の
かけもかほかに匂ひは
恋にくるるあひびとは
いかに苦しきこころとて

いし度も知にぬかづき
わが恋はいつりけん
あつとあはれこがらし
あまし旅路のほろし
誰かおしけんわがこひ
あつとほろしあかんとは

明治三十一年三月二十七日夜

